



六華苑の前で



第143回研修会 「ふるきよきもの伝承」 (その23)

2016年7月19日(火)~21日(木)

失われつつある
日本の精神文化を求めて

創立40周年記念特別企画

偉人のふるさとを訪ねて (松代編)

今回は、幕末を駆け抜けた天才学者、佐久間象山の故郷である長野県松代町を訪れました。
中山道を上り、長良川の鶴飼や桑名の六華苑にて雅楽鑑賞と伝統の技に触れる研修となりました。

一行がまず向かったのは、妻籠宿。五街道の一つであった中山道と飯田街道の分岐点に位置し、古くから交通の要所として栄えた宿場町です。
1968年から全国に先立って町並みの保存が進められていたため、現在でも江戸時代の面影が色濃く残っているのが特徴です。町並み散策の後、戸倉上山田温泉へ投

宿。名湯に浸かり、翌日からの研修に向けて英気を養いました。

象山記念館

この記念館は象山没100年目にあたる1964年、象山の生家跡に建てられました。日本で初めて電信実験を行った象山が制作し



象山ゆかりの品を見学する参加者の皆さん

た電信機や電気治療器などの機械を展示しています。

佐久間象山 コンパクト ガイド



好奇心おう盛な 天才学者

自作のカメラで撮影された象山像
1811~1864年

神童の名をほいままにした幼少期

信濃松代藩主である真田家の右筆を務めた佐久間一学の長男として生まれた象山。ト伝流剣術の達人であった父の影響を受け、幼少期から剣や儒学を学ぶ。また、3歳のころには易経の64卦を習得し、周囲を驚かせるとともに「神童」として名を馳せる。

傲慢な態度で多くの敵を作る

幼い頃から周囲に「神童」として褒められながら育ってきたこともあり、いつしか傲慢な態度が目立つように。そのため少年時代は喧嘩に明け暮れる毎日過ごす。「妻女山から槍がふる。佐久間の家から石が飛ぶ」とまで言われ、荒々しい気性だった。家老に無礼な態度をとって閉門を命じられたこともあったという。

欧米人を彷彿とさせる特徴的な外見

当時の日本人としては長身かつ筋骨隆々だった象山。影りが深く、二重まぶたで眼がギラギラしていたことから、幼少期は「テッポウ(松代の方言で「フクロウ」)」と呼ばれていた。

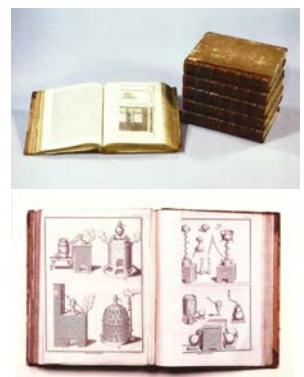
西洋の影響を受け研究に没頭

少々不遜な態度が目立っていたものの、勤勉な象山は藩主の真田幸貫から一目置かれる存在だった。

学習面では有力な後ろ盾を得た象山は、父の没後、江戸へ渡る。医学や地理学などの実学や技術を芸術という言葉で表現した「東洋道徳 西洋芸術」という思想的理念を持っていたため、列国に追いつこうと、近代洋式砲術をはじめ西洋のさまざまな学問を身に付けた。結果として象山が手がけた品は大砲や電磁石、カメラなど多岐にわたる。

私塾を設け幕末の志士たちに多大な影響を与える

江戸に私塾を開き、砲術や兵学、科学、数学などを教えた。教え子には勝海舟や吉田松陰、坂本龍馬などがおり、幕末を代表する一流の武士たちに大きな影響を与えたと言える。



象山が藩費で購入した「ショメール百科事典」
写真提供：象山記念館

象山神社

豊かな緑に包まれた象山神社。松代藩の中級藩士・横田家の子孫で元大審院長であった横田秀雄が象山没後50周年を機に建立を呼びかけ、25年後の1938年に創建されました。

境内入口には愛馬に乗った象山像が建つほか、象山が仮住まいとしていた萬居の茶室である煙雨亭が移築されており、象山の軌跡を感じることができます。



愛馬に乗った象山像



松代藩鐘楼(電信発祥の地)

鵜飼

1300年以上の歴史を持つ鵜飼は宮内庁の保護のもと、日本古来の伝統漁法として現在まで受け

おいしい食事と鵜飼見学に満足な様子の皆さん



鵜飼について解説して下さった山下鵜匠

【鵜飼とは】

「鵜舟」と呼ばれる鵜飼専用の舟に10~20羽の鵜とともに鵜匠、供乗り(舵取り役)、中乗り(助手)が乗り込みます。舟首にかがり火(鵜飼用の照明)を付け、鮎を驚かせたところを鵜が仕留めるといった独特の方法で漁をします。鵜の喉には紐が巻かれており、完全に獲物を飲み込むことができません。鵜が捕まえた鮎は「鵜鮎」と呼ばれ、高級食材として扱われています。

多度大社

商売繁盛、雨乞いの神を祀っている桑名の多度大社。南北時代から行われている「上げ馬神事」が有名で、毎年全国各地から約十数万人の参詣者が訪れます。



鵜匠の見事な手縄さばきを間近で見学

継がれています。今回は宮内庁式部職鵜匠の山下純司さんに、鵜飼について解説していただきました。十六夜の月に照らされた岐阜城のもと、二行は3艘そうに分かれて鵜飼見物へ。鵜匠・供乗り・中乗り、そして鵜の華麗なるチームプレーで鮎を捕らえる姿はまさに神業。その気迫あふれる姿に圧倒されながらも、一行はとれたての鮎の塩焼きをいただき、心もお腹も満たされた一日となりました。

【上げ馬神事とは】

毎年5月、周辺6区から選ばれた若者が騎手となって急勾配の坂を駆け上がり、その先に造られた2メートルほどの土の壁を乗り越える馬の数で、一年の吉凶を占う行事です。



中央の階段左の坂を馬が駆け上がる

六華苑

六華苑は大正二年、明治時代の豪商である二代目諸戸清六の邸宅として建てられました。木造2階建て天然スレート葺きの洋館は、鹿鳴館で知られるイギリス人建築家コンドルによって設計されたもの。その他にも和館や蔵、池泉回遊式庭園などがあり、和洋折衷の建物が印象的です。

細部まで計算された建物を見学した後、一行は六華苑のレストランを貸し切って開催した雅楽鑑賞へ。ここでは北野財団伝承研修で講師の経験がある、多度雅楽会の館主、田中松緑さんに案内していただきました。

【多度雅楽会とは】

館主の田中松緑さんは、多度大社の楽人(雅楽を奏する人)30年の経験をもとに、1300年前から歴史が始まり、代々桑名藩主が好んだ雅楽の伝統を守る活動をしています。



田中松緑さん

龍が戯れる様子を舞にした演目「茄曾利」



演目「胡蝶」は蝶が山吹の花の中を優美に舞う姿を表現

